

平成 22 年 4 月 19 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19500507
 研究課題名（和文） 体育授業における動機づけ方略の検討
 研究課題名（英文） An examination of motivational strategies in physical education learning
 研究代表者
 伊藤 豊彦（ITO TOYOHIKO）
 島根大学・教育学部・教授
 研究者番号：20144686

研究成果の概要（和文）：

本研究では、まず、体育授業における効果的な動機づけの方法を検討するための理論的枠組みを検討し、これまでの個人を中心とした働きかけに加え、動機づけ雰囲気、動機づけ構造、TARGET 構造といった体育授業を取り巻く心理的環境要因の重要性を指摘するとともに、動機づけ関連要因との関連を検討することを通して、適切な環境要因が動機づけと密接に関連していることを実証した。さらに、体育授業における心理的学習環境を測定・評価する尺度を作成し、動機づけを高めるための具体的な働きかけを提案した。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this study was to clarify the effective motivational strategies for physical education teachers in their classes. First, research on learning environments in physical education and its relation to students' motivation were reviewed. Second, in two studies, the author examined the relationship between learning environment (perceived motivational climate and motivational structure) and students' motivation in sport and physical education setting. Third, learning environment questionnaire in physical education was developed for elementary and junior high school students. Finally, some practical recommendations drawing from these studies were provided for physical education teachers.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	800,000	240,000	1,040,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学、身体教育学

キーワード：教育系心理学、身体教育学、身体心理学、動機づけ

1. 研究開始当初の背景

体育学習の成果を高めるためには、教育内

容の厳選とともに体育授業に対する学習意欲や動機づけを高めることが重要である。し

たがって、学習意欲や動機づけの個人差の把握、学習意欲や動機づけが高まるメカニズムの検討、それに基づく動機づけ方略の検討など、学習意欲の喚起に関する研究が幅広く行われてきた。

しかしながら、これまでの体育授業における学習意欲や動機づけに関連した研究は、学習意欲の喚起という教育実践上の視点からではなく、学習意欲や動機づけが高まるメカニズムの検討や個人差の把握を中心に行われているのが現状である。したがって、教育実践者である体育教師が学習意欲を喚起するという実践の改善を試みる場合、その具体的な指導法を提供できないという問題が残されていた。

2. 研究の目的

本研究は、これまでの体育授業に対する学習意欲や動機づけに関連する研究について慎重に考慮した結果、教師の指導行動や動機づけ雰囲気などの学習環境にかかわる要因を取り上げ、これらの視点から体育授業における適切かつ有効な動機づけ方略を検討することを目的とするものである。

本研究は、これまでの個人を対象とした動機づけ方略の検討から、クラス全体への動機づけ方略を総合的に検討しようとするもので、体育授業における動機づけ研究領域での学術の進展、及び教育実践への介入に対して大きく貢献することが期待できる。

3. 研究の方法

本研究の具体的な方法は、以下の通りである。

(1) 学習意欲の喚起、とりわけ動機づけ方略、動機づけ構造、動機づけ雰囲気、学習環境などに関する文献的研究を行う。

(2) 文献的研究に依拠した実証的研究を行う。

(3) 体育授業における効果的な動機づけ方略を検討するため、体育授業における学習環境を診断・評価できる尺度を小・中学生を対象に実施する。

4. 研究成果

(1) 学習意欲の喚起に関する文献的研究と理論的枠組の検討 (研究 1)

①目的

体育授業における学習意欲や動機づけに関する文献を中心に収集し、現状の把握と動機づけ方略の理論的枠組の検討を試みた。

②方法

動機づけ方略、動機づけ構造、動機づけ雰囲気、学習環境などをキーワードに文献検索を行い、内外の関連文献の収集・検討を行った。

③結果

文献研究では、これまでのわが国の体育に関する動機づけ研究が、動機づけを規定すると考えられる a. 児童・生徒、b. 課題・教材、及び c. 教師の 3 つの要因のうち、主として達成動機、原因帰属、達成目標など、児童・生徒個人の要因に焦点が当てられてきたことを指摘し、「クラス全体」の指導を行う必要のある教師にとって利用しにくいといった問題点を指摘した。

理論的枠組に関しては、体育授業における効果的な動機づけ方略を検討する場合、課題・教材や教師の指導といった視点を取り入れる必要があることを指摘し、とりわけ学級風土、TARGET構造 (Epstein, 1983) や動機づけ構造といった児童・生徒を取り巻く学習環境全体の視点から幅広く動機づけ方略を検討することが有望であることを指摘した。また、現時点では、体育授業における学習環境を客観的に診断・把握できる尺度が開発されていないことから、教師自身が体育授業における動機づけを把握し、新たな取り組みの資料とするために、各クラスの体育における学習環境を把握する必要性を指摘した。

(2) 動機づけ雰囲気と攻撃行動との関係 (研究 2)

①目的

学習環境要因が動機づけに及ぼす影響を検討するために、動機づけ雰囲気と攻撃行動を取り上げ、それらの関連を検討した。

②方法

サッカー選手 157 名を対象に、a. 指導者の熟達志向、熟達志向、協調、公平さ、指導者の成績志向、成績志向、失敗の恐れ の 7 つの尺度から構成される「チームの動機づけ雰囲気尺度」と、b. 身体的攻撃性因子、報復的攻撃性因子、攻撃的なプレースタイル因子、闘志因子、競技達成行動因子、情緒的攻撃性因子、困難の克服因子 の 7 つの尺度から構成される「競技場面における攻撃性測定尺度」からなる質問紙調査を実施した。

③結果

動機づけ雰囲気と競技場面における攻撃性の関係を重回帰分析を用いて検討した結果、攻撃性のうち、まず身体的攻撃性に対して、協同的雰囲気があるほど抑制されるのに対して、失敗の恐れが高いほど促進される傾向が認められた。

次に攻撃的プレースタイルに対して、熟達志向的雰囲気、協同的雰囲気、指導者の成績志向的雰囲気があるほど促進される傾向が認められた。さらに競技達成行動に対して、指導者の成績志向的雰囲気、成績志向的雰囲気があるほど促進される傾向が認められた。困難の克服に対して、指導者の熟達志向的雰囲気があるほど促進される傾向が認められた (図 1)。

本研究結果は、動機づけ雰囲気が攻撃性を規定していることを明らかにするとともに、身体的攻撃性や情緒的攻撃性といった反スポーツパーソナリティ行動の抑制という視点からみると、チーム内において、男子で

は、協同的雰囲気高くする、かつ失敗の恐れを低くするといった雰囲気を作り出すこ

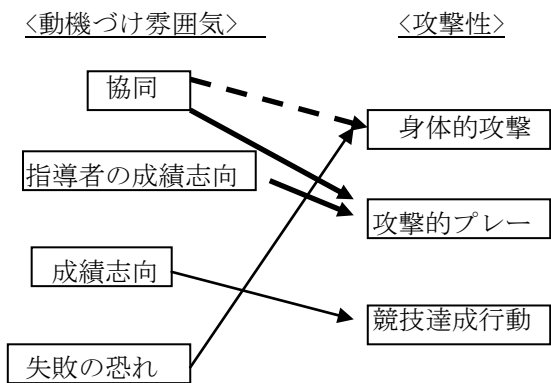


図1 動機づけ雰囲気と攻撃性との関係(男子)

+ → p<.10 → p<.05 → p<.01
 - - - → p<.10 - - - → p<.05 - - - → p<.01

と、女子では、公平さを担保し、かつ協同的雰囲気、指導者の成績志向的雰囲気を低くするといった雰囲気を作り出すことが有効であることが示唆される。

(3) 動機づけ構造とセルフ・ハンディキャッピングとの関連 (研究3)

①目的

学習環境要因が動機づけに及ぼす影響を検討するために、動機づけ構造とセルフ・ハンディキャッピングを取り上げ、それらの関連を検討した。

なお、セルフ・ハンディキャッピング (self-handicapping; 以下、SH と略す) とは、「自己の能力が評価される状況で失敗の可能性があるようなとき、自尊心あるいは体面を守るために成功の障害になるような状況を作り出すことで失敗を外的に帰属し、成功を内的に帰属できるようにする行為である」と定義されており、自尊心を維持・高揚させるための方略の一つと考えられている (松尾、1994)。

②方法

島根県及び岡山県の運動部に所属する高校生 286 名 (男子 185 名、女子 101 名) を対象に、a. 運動部活動の取り組みにおける SH 行動に関する質問項目 (37 項目)、b. チームの動機づけ構造に関する質問項目 (20 項目)、c. 目標志向性に関する質問項目 (21 項目) からなる質問紙調査を実施した。

③結果

SH に関する 37 項目について探索的因子分析を行った結果、8 因子が抽出され、それぞれの因子を「合理化」「意識の散漫」「完璧主義」「不安傾向」「逃避」「気持ちの不統制」「困難な課題の選択」「失敗の恐れ」と命名した。

動機づけ構造と SH との関連を検討するため

に重回帰分析を行った結果、コーチの能力志向が高いほど、「合理化」「不安傾向」「逃

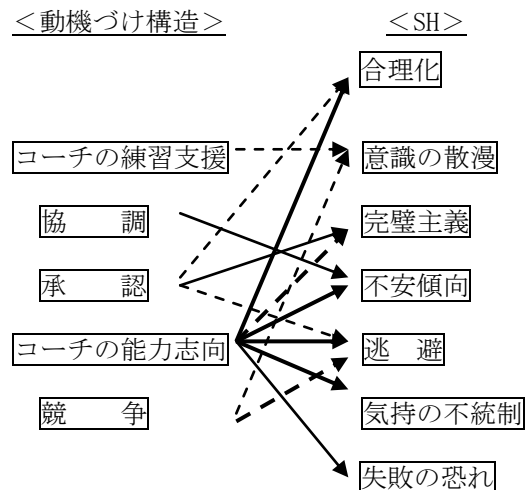


図2 チームの動機づけ構造と SH との関係

p<.05 → - - - → p<.01 → - - -
 実線は正、破線は負の係数を示す。

避」「気持ちの不統制」「失敗の恐れ」といった SH 方略を使用する傾向が示された。また、コーチの練習支援が多く、チーム内が承認・競争し合える環境であれば、「意識の散漫」「合理化」「逃避」といった SH 方略を抑制する傾向が示された (図 2)。

以上のことから、コーチが選手の能力だけを判断・評価するのではなく、積極的に練習を支援し、チーム内で承認・競争し合える環境を設定することで、SH 方略の使用を抑制する可能性が示唆された。

次に、目標志向性と SH との関連を検討した結果、熟達目標を重視する選手ほど、「合理化」「意識の散漫」「逃避」「失敗の恐れ」といった SH 方略を抑制する傾向が認められた。また、成績目標を重視する選手ほど、「合理化」といった SH 方略を使用しやすい傾向

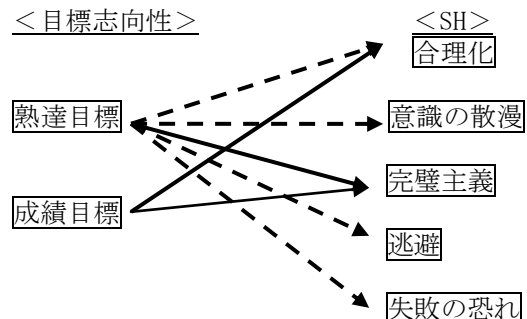


図3 個人の目標志向性と SH との関係

p<.05 → - - - → p<.01 → - - -
 実線は正、破線は負の係数を示す。

が認められた (図 3)。

以上のことから、成績ばかり重視する選手は自尊心を防衛するために言い訳をしやすくなることが示された。つまり、選手に熟達目標を持たせることで、SH 方略の使用を抑制する可能性が示唆された。

(4) 小学生用体育授業における学習環境測定尺度の開発 (研究 4)

①目的

本研究は、小学生を対象に、体育授業における動機づけに関連する学習環境を検討するとともに、それらが動機づけとどのような関係にあるのかを明らかにすることを目的として行われた。

②方法

島根県、岡山県、愛媛県の小学生 281 名 (男子 152 名、女子 129 名) を対象に、a. 体育における学習環境に関する質問項目 (28 項目)、b. 学習動機に関する質問項目 (充実志向、実用志向、集団志向、優越志向、成績志向、承認志向、課題回避志向の 7 つの下位尺度各 4 項目計 28 項目)、c. 学習方略に関する質問項目 (認知的方略、動機づけ方略、人的リソース方略、SH 方略の 4 つの下位尺度各 3 項目計 12 項目)、d. 心理的欲求に関する質問項目 (有能さへの欲求、自律性への欲求、関係性への欲求の 3 つの下位尺度各 2 項目計 6 項目) からなる質問紙調査を実施した。

③結果

まず、体育における学習環境に関する 28 項目に対して、探索的因子分析を行った結果、「自主的取り組み」「協調・姿勢」「仲間の支援」「能力重視」「社会的規範の欠如」「努力の承認」の 6 因子が抽出された。

学習環境と動機づけ要因との関連を検討するために、動機づけ関連要因を目的変数、学習環境を説明変数とした重回帰分析を行った。その結果、まず、「自主的取り組み」が充実志向、実用志向、集団志向、優越志向、成績志向を高め、課題回避志向を抑制する傾向があることが示された。次に、「協調・姿勢」が充実志向、実用志向、集団志向、承認志向を高める傾向があることが示された。また、「社会的規範の欠如」が充実志向、優越志向、承認志向を高め、課題回避志向を抑制する傾向があると示された。最後に、「能力重視」が充実志向、集団志向を抑制し、成績志向、課題回避志向を高める傾向があることが示された。

次に、学習環境と学習方略との関連を検討した結果、まず、「自主的取り組み」と「社会的規範の欠如」が認知的方略、動機づけ方略、人的リソース方略の使用を高める傾向があることが示された。次に、「協調・姿勢」が認知的方略、動機づけ方略の使用を高め、SH 方略を抑制させる傾向が認められた。最後に、「能力重視」が人的リソース方略を抑

<学習環境>

自主的取り組み

協調・姿勢

仲間の支援

能力重視

社会的規範の欠如

努力の承認

<学習方略>

認知的方略

動機づけ方略

リソース方略

SH 方略

図 4 学習環境と学習方略との関係

$p < .05$ → → → $p < .01$ → → →

実線は正、破線は負の係数を示す。

制し、SH 方略の使用を高める傾向が示された (図 4)。

さらに、学習環境と心理的欲求の充足との関連を検討した結果、まず、「自主的取り組み」「協調・姿勢」が有能さ、自律性、関係性への欲求をそれぞれ充足させる傾向が認められた。それに対して、「能力重視」では、有能さへの欲求、関係性への欲求の充足度が低くなる傾向が認められた。

以上のことから、小学生を動機づけるうえで、学習への自主的取り組みを奨励するとともに、協調性を重視し、児童の努力を認めることが重要であるとともに、能力や素質、成績を重視した評価をできる限り回避する必要性が示唆された。

(5) 中学生用体育授業における学習環境測定尺度の開発 (研究 5)

①目的

本研究は、中学生を対象に、体育授業における動機づけに関連する学習環境を特定するとともに、学習環境と生徒の動機づけ要因との関連を検討することを目的とした。

②方法

島根県、岡山県及び愛媛県の中学生 287 名 (男子 127 名、女子 160 名) を対象に、a. 体育における学習環境に関する質問項目 (28 項目)、b. 学習動機に関する質問項目 (充実志向、実用志向、集団志向、優越志向、成績志向、承認志向、課題回避志向の 7 つの下位尺度各 4 項目計 28 項目)、c. 学習方略に関する質問項目 (認知的方略、動機づけ方略、人的リソース方略、SH 方略の 4 つの下位尺度各 3 項目計 12 項目) 及び、d. 心理的欲求に関する質問項目 (関係性への欲求、自律性への欲求、有能さへの欲求の 3 つの下位尺度各 2 項目計 6 項目) からなる質問紙調査を実施した。

③結果

まず、体育授業における学習環境に関する質問項目に対して探索的因子分析を行った

結果、「熟達雰囲気」「自主的取り組みと承認」「能力重視」「社会的規範の欠如」の4因子が抽出された。

次に、学習環境と動機づけ要因との関連を検討するために、動機づけ関連要因を目的変数、学習環境を説明変数とした重回帰分析を行った。その結果、クラスの雰囲気が「熟達雰囲気」及び「自主的取り組みと承認」が高いと認知する生徒ほど、充実志向、実用志向、集団志向、優越志向が高くなる傾向が示された。また、「自主的取り組みと承認」が高いと認知する生徒ほど、承認志向が高くなり、課題回避志向が低くなる傾向が示された。さらに、「能力重視」及び「社会的規範の欠如」が高いと認知する生徒ほど、生徒の集団志向が低くなる傾向が示された。加えて、クラスの雰囲気が「能力重視」が高いと認知する生徒ほど、成績志向、承認志向、課題回避志向が高くなる傾向が示された。

学習環境と学習方略との関連では、図5より、クラスの雰囲気が「熟達雰囲気」及び「自主的取り組みと承認」が高いと認知する生徒ほど、認知的方略、動機づけ方略、人的リソース方略を採用しやすいことが示された。また、クラスの雰囲気が「熟達雰囲気」が高いと認知する生徒ほど、SH方略を採用しにくいことが示された。さらに、クラスの雰囲気が「能力重視」が高いと認知する生徒ほど、SH方略を採用しやすい傾向が示された。

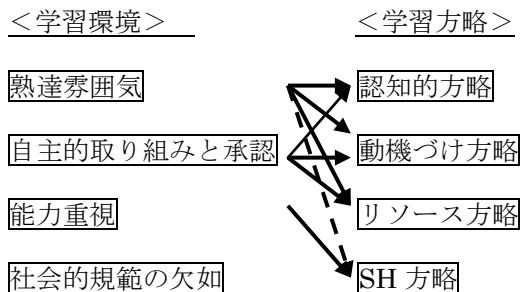


図5 学習方略と学習方略との関係

$p < .05$ → --→ $p < .01$ → --→
実線は正、破線は負の係数を示す。

学習環境と心理的欲求との関連では、図6より、クラスの雰囲気が「熟達雰囲気」及び「自主的取り組みと承認」が高いと認知する生徒ほど、関係性、自律性、有能さへの欲求が満たされやすいことが示された。また、クラスの雰囲気が「能力重視」が高いと認知する生徒ほど、有能さへの欲求が阻害されやすいことが示された。

以上のことから、中学生の場合、教師が用いる体育授業における動機づけ方略として、生徒の自主的取り組みを奨励し、その努力を評価するような指導方略を積極的に採用するとともに、能力や素質のみを重視した評価

<学習環境>

<心理的欲求>

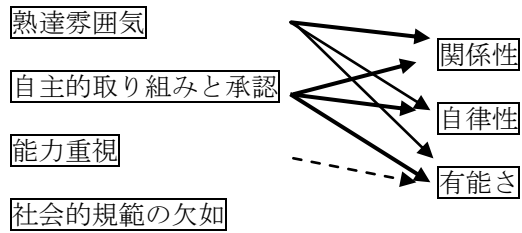


図6 学習方略と心理的欲求との関係

$p < .05$ → --→ $p < .01$ → --→
実線は正、破線は負の係数を示す。

を可能な限り回避することの重要性が示唆された。

(6) 研究成果のまとめ

研究成果の概要は、以下の通りである。

①文献研究の結果、動機づけ雰囲気や動機づけ構造などの学習場面の環境要因は、体育学習における児童・生徒の動機づけを高めるために有望な視点であることが明らかになった。

②学習環境要因と動機づけ関連要因との関連を検討した結果、学習環境が動機づけを規定していることが明らかとなった。

③最後に、文献的研究に基づいて作成した体育授業における学習環境を診断・評価できる尺度を小・中学生を対象に実施した結果、学習環境に係る因子として、小学生では、「自主的取り組み」「協調・姿勢」「仲間の支援」「能力重視」「社会的規範の欠如」「努力の承認」の6因子が、中学生では、「熟達雰囲気」「自主的取り組みと承認」「能力重視」「社会的規範の欠如」の4因子がそれぞれ抽出され、体育授業における重要な学習環境要因が明らかになった。さらに、抽出された学習環境要因と学習動機・学習方略・心理的欲求などの動機づけ関連要因との関連を検討した結果、小学生では、授業における自主的取組や協調が動機づけを高める方向で影響していたのに対して、能力を重視した評価が優位であれば、児童の動機づけは抑制される傾向が示された。また、中学生では、熟達雰囲気と自主的取組と承認因子が動機づけを促進させるのに対して、能力重視因子は、動機づけを抑制する傾向が認められた。

以上のことから、教師が用いる体育授業における動機づけ方略として、児童・生徒の自主的取り組みを奨励し、その努力を評価するような指導方略を積極的に採用するとともに、能力や素質のみを重視した評価を可能な限り回避することの重要性が示唆された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕（計 2 件）

①伊藤豊彦、学校体育における学習環境と動機づけ、山陰体育学研究、24, 11-20, 2009、有

②石倉啓順・伊藤豊彦、サッカー選手の攻撃行動に及ぼすチームの動機づけ雰囲気の影響、山陰体育学研究、24, 27-36, 2009、有

〔学会発表〕（計 0 件）

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊藤 豊彦 (ITO TOYOHICO)

島根大学・教育学部・教授

研究者番号：20144686

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：